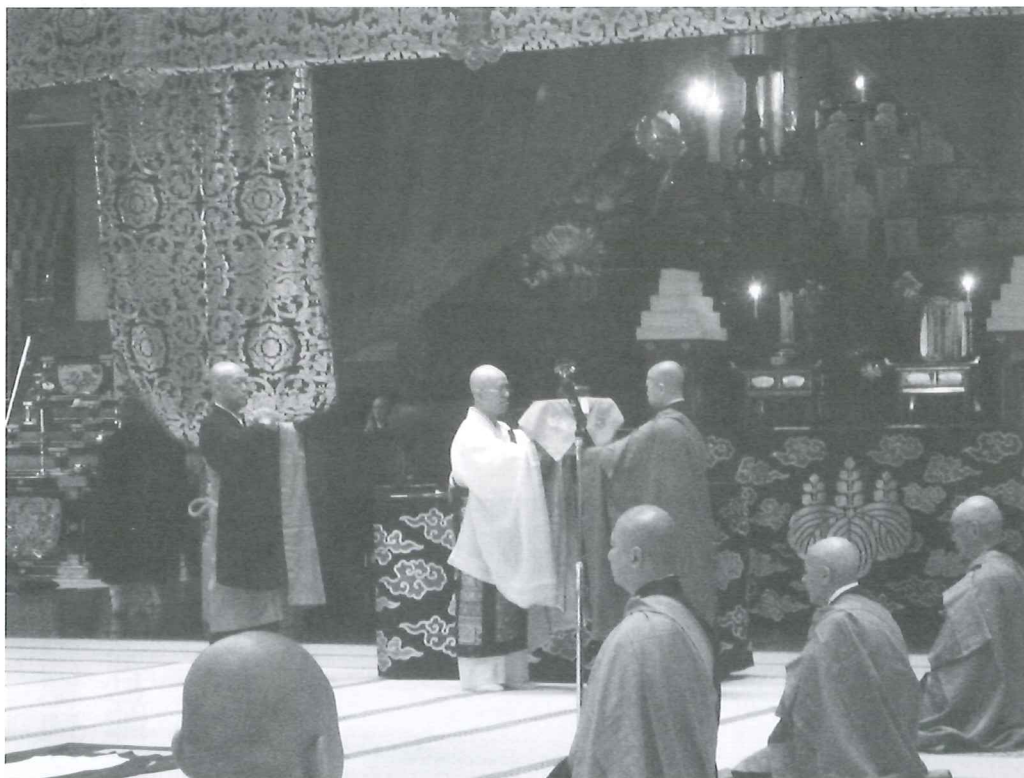




總持寺での法要



指 月

SHIGETSU

修禅寺・寺報
第 54 号

発行所 (〒410-2416)
伊豆市修善寺964
福地山 修 禅 寺
電 話 (0558)72-0053
FAX (0558)72-9680

歩歩諸佛を生む

住職 吉 野 真 常

四月十日から十一日、修禅寺檀徒並参禅会会員等二十五名にて一泊で大本山總持寺へ参拝致しました。小生が十一日早朝の御両尊献粥諷經(總持寺御開山・瑩山禪師さまと二世・峨山禪師さまへ朝のお粥を献ずる法要)の導師を拝命したためです。

十数年前、大本山總持寺に三年間程『単頭(タントウ)導し監督する役』という役職で修行しておりました。久しぶりの大本山總持寺は、諸堂が新しくなり、境内も多少変わっておりましたが、やはり以前と変わらない緊張感があり、大変うれしく思うと共に身心が引き締まる感が致しました。

一泊でしたが、大本山總持寺の空気を吸い、若い修行僧

(雲水)達に接し、当時の事が思い出されました。それは、修行僧達のことです。

「今の若いもんは・・・」という言葉をよく耳にしますが、当時若い修行僧達と毎日生活を共にしていた私には、「今の若い者も、すてたもんじゃないぞ。」という思いが強くなりました。打てば響く、そして純粹ですね。この猫も杓子も自由、自由と言っている時代に数年間ではあるが、修行道場の厳しい規則の中に身を置いた若者が、自由の社会に帰っていく時、どう言う風が彼らの回りに吹くのだろうか。毎朝四時からの坐禅や読經という無心の行を続けた若者は、我臭粉粉なる社会だけに居た人達と、どこが違うって行くのだろうか等。内

心、期待しながら彼らの将来を楽しみにしていたのです。

勇猛の衆生の為には成佛

一念にあり

懈怠の衆生の為には涅槃

三祇に亘る

という禅語があります。懈怠の衆生には、真の安心は、いくら待っても来ない。三祇とは長い時間、永遠を言います。そして成佛は、一念すなわち今・ココにあると。

勇猛の衆生とは、今・ココに力をいたす者。而今に誠を尽くす者と言ってもいいでしょう。絶対の安心は、沢山の事を知る事ではありません。外に求める事でもありません。今・ココの命を、精一杯そして丁寧に生きたる事。成佛・真の安心は、ただその事だけにあるのです。

誰知歩歩生諸佛

諸佛單傳 今日聲

(洞上句中玄より)

大本山總持寺報恩大授戒会 焼香師随行団に参加して

水口 信夫



広い大祖堂での法要

菩提寺である修禅寺の吉野御前様が、大本山總持寺にて奉修される特別法要報恩大授戒会の焼香師(導師)を拝命され護持会役員として参列しました。この焼香師を拝命されることは、全国一万六千余の曹洞宗寺院の住職が毎年お勤めしても四百余年に一度という大変名誉な事であるそうです。

曹洞宗の大本山は福井県の永平寺と神奈川県横浜市鶴見の總持寺の二つを両本山としていますが、永平寺は観光旅行で何度か拝観した事がありますが、總持寺は今回初めて訪れたので受け売りではありますが總持寺について少し述べてみたいと思います。

開祖である瑩山紹瑾禪師は八歳で永平寺に登り十三歳で出家されたそうです。以来勉学と修行を積まれ、二十八歳の若さで徳島に城満寺を開かれた後石川県能登に總持寺を開かれ、育てられた多くの弟子たちと共に積極的な布教を展開され当時の海運業の隆盛とあいまって曹洞宗は一気に全国へと広がったそうです。總持寺は能登にあって五

百七十年ほど栄えておりましたが、明治三十一年大火災に遇い多くの伽藍を失い、その後貫主になられた石川素童禪師が将来の展望と布教への使命から大英断をもって本山を横浜の鶴見に移されたそうです。また總持寺の總持とは「ご祈禱があらたか」という意味で、瑩山禪師のご遺志にそって社会福祉事業等を積極的に展開し布教の本山としての命脈を保っているそうです。今回總持寺を訪れた感想を私なりに一言で表わすと、道元禪師が開かれた永平寺の「静」に對し總持寺は「動」という感じがいたした次第です。

さて前置が長くなりましたが、吉野御前様の御導師としての印象ですが、御導師としてのお役目は瑩山禪師と峨山禪師の御両尊に猷粥諷經（けんしゆくふぎん）といってお粥を捧げる仏事だそうですが、薄暗い千畳敷きの大祖堂（本堂）に送迎の僧侶を先頭に侍者、侍香を従えて黄色の衣に白地に金欄の袈裟をかけ赤い如意を持った吉野御前様が入堂されますと、色白の肌に衣が大変よく似合い薄暗い堂内でも吉野御前様が明るくはつきり見えました。と、同時に、

その日の早朝は四月初旬の冷たい雨が降っていましたが、御前様の光が天に届いたかのように雨が止み、陽が差し込んできました。不思議に思いました。当然の事ですが法要中の諸作も大変落着いておられ、声も広い本堂内に響き渡り吉野御前様の素晴らしさを再確認した次第です。

又、法要中、吉野御前様を中心に約二百人の僧侶が本堂内を読經しながら蛇行して歩く行道には圧倒されました。仏具や經典を運ぶ供頭（くじゅう）の僧侶の諸作も大変よく揃っていて、動作がまるで絡繰り人形のように滑稽にも見えました。この様な大きな法要は初めての事で、幻想的でもあり神秘的で足のしびれを忘れ時間が非常に短く感じたのは私だけではないかと思えます。前日の夕食、当日の朝食に戴いた精進料理も大食の私には物足りないのではないかと心配しましたが、品数も多く充分で大変美味しく戴きました。

今回の特別法要に参列して大変感動しましたので、又このような機会がありましたなら積極的に参加したいと思いました。

【修禪寺護持会副会長】

修禪寺制中を終えて

輝 元 泰 文

早いもので、四月一日に修禪寺へ来てから、あつという間に三ヶ月が過ぎました。私は、修行僧が必ず通らなければならない関門である「首座（しゅそ）」の役目を果たすために、修禪寺にやって参りました。実は、吉野真常老師の元で首座として修行させていただくのが、平成十九年に袋井市可睡斎で老師の下で修行して以来の私の宿願でありました。首座とは、「修行僧の第一座」を意味し、修行期間の「制中」の間、修行僧の先頭に立つ役目です。とはいえ、昨日の今日修禪寺に来たばかりの者がいきなり先頭に立つて何かをできるわけがありません。さらに、私は発心をした年齢も遅く、修行も浅い身、「一から教えて頂いて、とにかく自分のできることでお手伝いできれば……」というのが、本当のところでした。

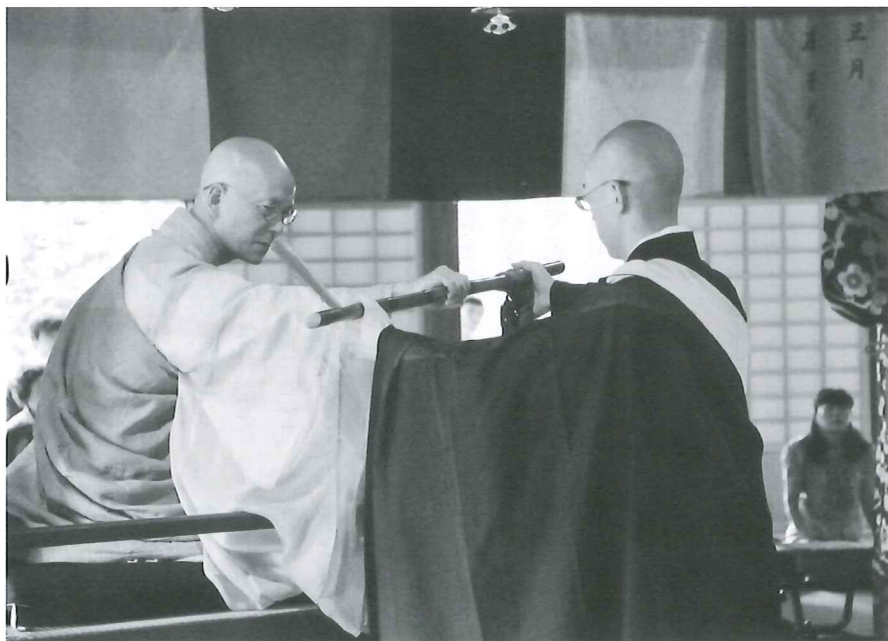
さて、私の修禪寺での一日の日程は、四時半起床、五時の梵鐘撞きの後、僧堂で坐禪。六時から本堂で朝のお勤め。八時から九時までは外の作務。その後は適宜指示

に従って法要の準備や山内の作務等を行い、三時十分からは夕方の坐禪。お寺を閉めた後は、夕飯やお風呂の準備。気づけば夜になっている、という感じていた。遅くとも十時頃には就寝しているのですが、短いですが、夜は、もっぱら法戦式の練習や勉強、休息の時間に充てました。

修禪寺の一週間の中でも、私が好きだったのは火曜日です。火曜日は坐禅会があるからです。この日は坐禅をして、方丈様の法話を聴いて、「ようし、またこれから今（ここ）を精一杯がんばるぞ」と禪を締めなおすような気持ちになります。坐禅会の方々との交流も楽しめました。

実は、この三ヶ月間の中での大きな試練の一つも、この坐禅会でした。方丈様が所用で都合がつかなくなったとき、私が方丈様に代わってこの坐禅会で法話をする事になったのです。住持に代わって首座が法を説く。まさに首座の力量が問われるときです。

最初は「急な代役だから」と思



法幢師さまより竹篋しゅつぺいを預かる
ほうどうし

皆の方を向いて話さなくっちゃあ……。あなたとはたとえ皆より若くつたつて、皆の前へ座つたらもう講師の先生なんだから。自信を持って下さいよ」と、坐禅会の方から叱咤激励を頂くこともありましたが、それを聞いて反省し、「そうだ、もうここへ座つて話し始めたら、取り繕つたつてもう無駄だ。たとえ若輩者でも、講師は講師だ。堂々と自分の境地を話してやろうじゃないか！」

い、今までの話のストックからお話できるだろうと引き受けたものの、実際には代役でお話すること計六回に及びました。おまけに二回目でこれまでのストックは尽きてしまい、「これはいつ代役を命じられても話せるようにしないとイケない」と危機を感じて、三回目からは本腰を入れて準備をして臨み、『正法眼蔵』『生死』の巻に

ついてお話することにしたのです。「学ぶは真似から」とばかりに、若僧が老師の真似事をしているようにで申し訳ありませんでしたが、僭越にも人生の大先輩方に対してその後三回にわたつて「生死」の巻の提唱をさせていただきました。しかし時には、「輝元さん、黒板やメモばかり見ながら話してはだめだよ。もっと自信もつて



大問答に臨む泰文首座和尚

と、ようやく決心が固まりました。拙い話ながら、あたかも我が子の成長を見守るように、一心に耳を傾けて下さった坐禅会の方々には感謝の念で一杯です。皆さんがい

つも聴いてくださったお陰でどれほど自分の励みになり、自信につながったことか。

そして、三ヶ月の最後に待ち受けていた大きな試練は、六月三十

日の法戦式でした。法戦式では、首座が、住持に代わって禅問答に答えるのです。しかし、現在ではあらかじめ問答を用意しておきま

た。そんなときに緊張を解してくれたのは、駆けつけてくれたかつての修行仲間たちでした。「輝元さんのあがり性は昔からちつとも

ものの、自分の力など実はちつぱけなもので、多くの皆様の支えがあつてこそということに、今更気づかされました。「自分がやらな

う「我」がポロツと落ちた瞬間でした。修禅寺山内の皆様、教区寺院の方々、遠路はるばる来てくれた修行仲間、応援に駆けつけてく

れた坐禅会の方々、多くの方々のお陰で、ここまで運んできていただいたのです。「ああ、もう何も

は無事法戦式本番を迎えました。

終わって見れば、法戦式もあつという間、三ヶ月もあつという間でした。さて、三ヶ月の修行で私は何を得たのか？

いいえ、得たのではなく、得るべきものはすでに天地に遍く行き渡っていたのです。仏法満ち足りた今・この自分の身体一つを持って、空手にして故郷に帰るだけ

【埼玉県寄居町 天正寺徒弟
修禅寺夏制中 首座和尚】

お師匠様へのお拝



分の力で成し遂げねば」と意気込んでいた

○七月十一日夜から十三日朝まで、修善寺小学校に通う「桂合子供会」の小学生三十八名と保護者数名の皆さんが、朝小学校に通い夕方修禅寺に宿泊・坐禅合宿する「通学

通学合宿

本堂前にはお釈迦さまのお生まれになったお姿の尊象「誕生仏」に甘茶をそそぐ（これを灌仏「かんぶつ」といいます）花見堂が置かれ、仏教婦人会役員さん接待のもと大勢の参拝者がお釈迦さまに甘茶をそそいでいました。

花祭り記念公演

○お釈迦さまの生誕を祝う「花祭り法要」が生誕日前日の四月七日（日）に本堂にて厳修されました。

法要後は、修善寺出身で全国各地で活躍されている山田とうしさんによるパントマイム記念公演が催され、大勢の参加者がたのしいパントマイムを楽しみ、本堂は大きな笑いと歓声に包まれました。



合宿」を行いました。

昨年続き二回目でしたが、朝早く起きての坐禅にも子供たちはみな真剣に坐っておりました。良い思い出になれば幸いです。

火曜坐禅会

一月～七月九日迄の参加者数

延べ 四六九名

八月～十二月のお寺の行事です

●八月一日(木)

午後六時「山門大施食会」

午後七時「第九回修禅寺寄席」

午後八時「供養盆踊り」

●八月二十・二十一日(火・水)

「秋季弘法忌大祭」

※二十日(火)

午後七時半 万灯会

二十一日(水)

午後四時半 大祈禱会

午後七時半 川施食会

奉納花火大会

●九月二十三日(月) 午前十時

「秋彼岸会法要」

●十一月七～九日(木～土)

「桂谷八十八箇所巡拝」

●十二月八日(日) 午前十一時

「釈尊成道会」

●十二月二十二日(日) 午後一時

「奥の院星祭り」

●十二月三十一日(火) 午後十二時

「除夜の鐘」



今年は綺麗に咲きました

葭原観音講のおささぐさ

修善寺自然公園入口から階段を登ったところ紅葉林のなかに「葭原(よしはら)観音堂」があります。このお堂は、大正十三年に旧修善寺町の町制施行記念事業のひとつとして建立されました。

現在のお堂は老朽化にともない平成三年に改築されたもので、お堂の中にはご本尊として「如意輪観音」さまがお祀りされております。如意輪観音さまは一切の苦から私達を救ってくださる菩薩様で「救世菩薩」とも呼ばれております。この葭原観音堂では、創建以来約九十年、今でも旧修善寺町各町内有志の皆さんにより毎月十七日に観音講が行われています。

毎月十七日

午前十時よりお経とお念仏

修禅寺住職が参ります！

ぜひ、皆さまにもご参加いただきたくお願い申し上げます。



観音講の様子



葭原観音堂